

【特集】日本哲学ワークショップ：物語り論の今

張 政 遠

2023年3月6日に東北大学にて「日本哲学ワークショップ：物語り論の今」が開催された（主催：科研費「日本哲学における論理と感情の系譜」、共催：東北大学哲学倫理学共同研究室、求真会）。基調講演者に野家啓一先生（東北大学名誉教授）、報告者に鹿島徹先生（早稲田大学）、廖欽彬先生（中山大學）、林永強先生（獨協大學）、FONGARO ENRICO 先生（南山大學）と私、張政遠（東京大學）である。この場を借りて、主催校である東北大学の直江清隆先生、城戸淳先生に感謝の意を表したい。

本特集には、野家先生・鹿島先生・廖先生・林先生・私の論稿を収録している。物語りという概念、物語り論、あるいは物語の哲学に関しては、まさに多岐にわたっている。ここでは、各論を要約するよりも、野家先生の論文の冒頭を引用していこう。

今回「物語り論の今」と題するワークショップが開催されるに当たって基調講演を求められたが、私が「歴史の物語り論」の最初のヴァージョン（「物語行為論序説」）を発表したのは1990年のことであり、単行本（『物語の哲学』1996）の形で刊行されてからも、すでに30年近くを閲している。それゆえ、ここでは過去の論考を「反復する」のでも「捨てる」のでもなく、それを私なりに「学びほぐし」「考えほどく」ことを試みたい。その際に補助器具の役目を果たしてくれるのは、E・H・カーの名著『歴史とは何か』の新訳（近藤和彦訳、岩波書店、2022年）とマイケル・ダメットの晩年の著作『真理と過去』（藤田晋吾・中村正利訳、勁草書房、2004年）である。

『歴史とは何か』の新訳はすでに一年前に刊行されたが、世の中はまだコロナ禍

の中にあつた。そして、2023年ほどのような年であるかいうと、阪神大震災から28年、東日本大震災から12年、そしてロシアによるウクライナ侵攻が1年以上を経た年であり、地球温暖化によって観測史上最も暑い夏になる可能性がある年でもある。言うまでもなく、震災の記憶が風化しており、戦争への関心も大分薄くなっている。天災と人禍をわすれないために、物語りの力が問われているはずである。

私たちはいま、ほかならぬ「物語り論」のポテンシャルとリミットを検討しなければならない。本特集は、検討のための糸口になれば幸いである。